銀世界の氷龍

氷翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀世界の氷龍

【Ｎコード】
Ｎ１４３０Ｖ

【作者名】
氷翠

【あらすじ】
辺り一面、氷の世界。
そこにいるのは、身体中すべてが氷でできた、一匹の巨大な龍。
今日もその氷龍のもとに、１人の子どもが訪れる。
日番谷と氷輪丸が精神世界で話をする話。

（前書き）

どうも今晩和。
ハガレン映画を見てきた氷翠です（関係ないですが）。

今作は妄想が混じっております。申し訳ないです。
いやぁ、1回くらいこんな話しててもおかしくないんじゃないかな？と思いまして…
ほんの少し、私のちょっとした妄想にお付き合いくださいませ。

では、どうぞ。
誤字脱字などございましたら、ご連絡ください。

辺り一面、すべて氷の、銀世界。

そこにただ一匹、まるで空を泳ぐように飛んでいるのは。
身体、翼、牙などすべてが氷でできた龍。

紅い瞳でその世界のすべてを睨み。
時折その氷原に降り立っては、灰色の空を見上げ。
しばらくしたらまた、その空へ飛び立って世界を睨み回す。

まるで他にやることがないように、氷龍はその行動を繰り返していた。

ある一時(いっとき)を除いて。

何者かがその世界に入り込んだのを感じた氷龍は、まるで歓喜するかのようにその身をくねらせてその“何者か”のもとへ向かう。

そこにいたのは、その世界の色のように、銀色に輝く髪を持った、少年というのにも幼いほどの子どもだった。
その子どもは近付いてくる氷龍の気配を感じてそっちの方へ顔を上げると。
「氷輪丸。」
その氷龍の名を呼んだ。

名を呼ばれた氷龍ーーーーーー氷輪丸は、静かにその子どもの傍(そば)に降り立つ。

氷輪丸と比べてその子どもは、氷輪丸が丸飲みできるほど小さい。
“いつも御苦労だな、小僧。”
子供に向けてはなった声は、低くその世界に響いた。
子どもは氷輪丸のその言葉に、もともと刻まれていた眉間の皺を深めて返す。
「『小僧じゃねぇ』っていつも言ってんだろ。
俺の名前は、“日番谷冬獅郎(ひつがやとうしろう)”だ。」
腕を組み、ぶすっとした声で子ども――――日番谷冬獅郎がそう言うと、氷輪丸は“そうだったな、主(あるじ)。”と、まるで微笑むかのようにその紅い瞳を細めて、言葉を返した。
まるで照れ隠しのように、日番谷は頭をガシガシと掻く。
そのとき、腕の動きと共に黒い着物の袖が揺れ、その着物の揺れと共に白い羽織の裾(すそ)が小さく翻(ひるがえ)った。
“いつも感心なことではあるが、今日はどのような用があって参った?”
「惚(とぼ)けるなよ。わかってんだろ。」
僅かに頭を日番谷に近づけるようにして尋ねた氷輪丸に、日番谷は紅い瞳を睨み上げながら言った。
「俺の卍解が不完全のは、本当にこの身体が未熟だからなのか。
それを聞きに来たんだ。」
日番谷は以前、敵に卍解が未完成であることを指摘された。
その敵は“日番谷が未熟な身体であるが故”としていたが、日番谷自身、卍解が未完成であることと未熟であることは理解していた。
しかしその未熟さが、本当に未完成である卍解と繋がるのか。

日番谷はそれを確かめに来たのだ。

「改めて聞くぞ、氷輪丸。
俺の卍解を未完成に留(とど)めているのは、俺が、俺の身体が、未熟だからか？」

大きな紅い瞳をじっと見つめ、日番谷は静かに氷輪丸に問うた。
日番谷の翠の瞳を静かに、見つめ返した氷輪丸は少しの間をおき、
低い低い声で答えた。

“応(おう)であり、否(いな)である。”

氷輪丸のその言葉に、日番谷は目を瞠(みは)った。

「……どういう意味だ・・・。」
何を言いたいのか、自分の半身のはずなのにわからなかった。
しかしそれを悟られまいと、無理矢理に気持ちを抑えつけ、抑えた
声で呟く。
半身ゆえに日番谷の憤(いきどお)りを知っているはずの氷輪丸は、まるで挑発
するかのような口振りで言葉を発する。
“言葉の通りだ。
主(あるじ)は確かに、霊子の身体は幼い形(なり)をしている。

されども、護廷隊の実力主義同様、力さえあれば屈服はいとも容易くなろうもの。
主(あるじ)はまだまだ、私の力のすべてを従えるほどの力は……”
「なら！！」
日番谷の叫び声が、氷輪丸の言葉を遮り氷原に響く。

その瞬間、日番谷を中心として足元に、氷の結晶がいくつか立って。
空に、雲が湧き始める。
暗い暗い、灰色の雲が。幾重にも。

両の拳は固く、指が白くなるほど固く、握られている。
固く握られすぎて、小さく震えていた。
「……なら、どうしろってんだよ・・・。」
今度は小さい、消え入りそうな声を、俯きながら放った。

そんな声を聞き、氷輪丸が憐(あわ)れむかのような声音で語り掛けた。
“力のない己が、それほど惨(みじ)めか？”

ぴたりと、拳の震えが止まる。

“力があれば、すべての物を守れるのか？”

ぴくり、と僅かに拳が跳ねる。

“「力があれば」と、嘆くのみか？”

今度は、肩が。

“『日番谷冬獅郎』は誠に、そう思うのか？”

その言葉にやっと、顔を上げた。

“お前自身がそう思っていては、どうしようもできぬ。
されども、意識ひとつですべてが変わることもある。
力がないならないなりにその頭を捻(ひね)り、闇雲(やみくも)でもがむしゃらでも良(よ)い、何かに向かって行(ゆ)け。
お前の脚はそのためにあるものだ。
立ち止まり、考えあぐねるためにあるのではない。
迷い無く真(ま)っ直(す)ぐに進むことこそが心の強さであり・・・
そしてそれこそが、私の主(あるじ)ーーーーーーーーーー『日番谷冬獅郎』だ。
”

世界に低く低く響くその声に、優しさばかりが感じられた。
それは、響いていた余韻が消えてさえもまだ、感じられる。

氷輪丸の言葉を噛み締めているのだろうか。

じぃっと氷輪丸を見つめたまま、日番谷はまったく動かない。

己よりも数倍、いやもしかしたら数十倍もあろうという氷龍を見上げて見つめながら、唇を噛み締め、何かに思いを巡らせている。

やがて。

ふ、と握り締めていた手からすべての力を抜き。
眉間の皺も幾らか解(ほど)き。
口角を僅かに上げて。
大きく瞠っていたその瞳を、僅かに細めた。

同時に空の厚い雲も晴れ、まだ弱いながらも日の光が銀色の世界を照らしていく。

「ーーーーーーーーーすまなかったな、氷輪丸。」

“気にするな。”

ふっとため息をついたかのように、しかしどこかスッキリしたかのような声で言葉を零(こぼ)すと、氷輪丸は短く返す。

そのとき、日番谷の身体が僅かに光を帯び始めた。

日番谷のその姿を見て、氷輪丸は飛び立たんと氷の翼をひろげて更に言った。

“言ったことは言った。

この後(のち)　どのような道を歩くかは、小僧次第だ。

お前が行(ゆ)かんと決めた道を、共に歩むことを約束しよう。

何かあればいつでも来(こ)い、小僧。”

優しく響く氷龍の声に。

小僧じゃねぇって言っただろ。

日番谷がそう返してから姿を消したのを横目(よこめ)で見届けると、氷輪丸はまた、空へと飛び立った。

久し振りにその世界を照らす光によって、氷輪丸の氷の身体がキラキラと煌(きら)めいていた。

この時の氷輪丸の言葉があったために、決戦後すぐに稽古を始めら

れたと言っても過言ではないかもしれない。

（後書き）

と、まぁ…こんなお話です。
氷輪丸の答えは、私が考えた形の答えです。
原作とは違います。絶対に。

妄想にお付き合いくださり、本当にありがとうございました。
なにか感想がありましたら、どんどん書き込んでください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1430v/

銀世界の氷龍

2011年10月8日04時16分発行